

議 事 録 (平成 28 年度 第 1 回糸魚川市総合教育会議)

糸魚川市総務部総務課

日	平成 28 年 9 月 28 日 (水)	時間	9 : 00 ~ 10 : 26	場所	糸魚川市役所庁議室
件名	議事 (1) 学力向上の取組について (2) いじめ、不登校の状況について				
出席者	【出席者】 15 人 市長 米田 徹 教育委員会 田原秀夫 (教育長) 佐藤英尊 (教育長職務代理者) 永野雅美 (教育委員) 楠田昌樹 (教育委員) 靄本修一 (教育委員) (事務局) 総務部 金子裕彦 (総務部長) 山本将世 (総務課長) 渡辺 忍 (総務課長補佐) 中田直樹 (総務課行政係主任主事) 教育委員会 佐々木繁雄 (教育次長・こども課長) 山本 修 (こども教育課長) 渡辺孝志 (生涯学習課長) 磯野 茂 (文化振興課長) 磯野 豊 (こども課長補佐) 林 壮一 (こども課管理係長) 【欠席者】 0 人 <div style="text-align: right;">(敬称略)</div>				
	傍聴者定員	10 人	傍聴者数	3 人	

会議要旨

<p>1 開会 (9:00)</p> <p>2 市長あいさつ</p> <p>本年 5 月 20 日付けで、新たに靄本修一さんから教育委員に就任いただいた。本日は新年度の体制になって、初めての総合教育会議になる。</p> <p>昨年度は委員の皆様からは教育大綱についてとりまとめをいただいた。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。</p> <p>今年度からは、教育大綱の方針に基づき、教育関係者の皆様と一体となって、糸魚川市の教育施策を総合的に推進してきているところである。</p> <p>本日は、「学力向上の取組」、「いじめ、不登校の状況」について議題としている。</p> <p>どちらも当市の教育に関しましては、大変重要な課題であるので、委員の皆様から活発なご意見またご提言をいただきたい。</p> <p>3 議 事 ※進行 米田市長</p> <p>(1) 学力向上の取組について</p> <p>資料No.1 「学力向上の取組みについて」事務局が説明。</p>

○教育長職務代理

中学校の学力が50に至らないということの中で、平成27年に48.9だったものが28年に49.7と1ポイント向上しているということは非常に大きく評価できる。

では、なんで1ポイント向上したのかっていうことをどう分析しているかは、学力向上を目指す方の側としては非常に重要な視点であり、突き詰めなければならない問題点であると思う。

この点について、今あるいは今後どのように考えていくのかお聞きしたい。

○事務局

上昇の要因としては、日々の授業改善がなされていることだと思っている。毎日毎日の積み重ねにより学力が向上していくと考えており、学校現場の先生方の毎日のわずかずつの改善が功を奏していると考える。明日、全国学力学習状況調査の結果も公表となる。そういったことも併せてこの上昇してきた結果、上昇してきた要因についてももう一度よく分析をしていきたい。

また、学校ごとに違ってくるところもあるかと思うので、それについても徹底的に分析をしていきたい。

○教育長職務代理

先生方がどれだけ意識しているのかというのはなかなかわからない。結果として授業改善がなされたから結果が出たというように分析しているだけである。問題は、今後も継続して学力向上を目指すのであれば一人一人の先生方の意識、構え、覚悟、こういったものが学力向上に向かっていないといけないと思う。そういう意味で、それらについてはどんな考えか。

○事務局

昨年度から指導主事が年に3回、学期に1回は学校を訪問し、授業を見て、管理職や担当の教員に指導している。そういうところから、教員の「見られる」ということにより意識も変わってくると思う。今年度は、その授業改善のチェックリストも示した。これをまた一つの視点として授業改善に役立ててくれているものと思う。それによって、子どもたちへの指導の意欲も意識も徐々に変わってきている。

○委員

小学校が全国平均よりも数ポイント上であって、中学校の方はわずかながら全国平均までいかないというような実態であるが、最後の「その他の取組」について、非常に地道な取組なのだが、学校訪問で各学校を回らせていただいたとき、各学校の校長先生方の想いや願いみたいなものが、具体的な教職員の動きになって、授業を変えようという、そういう問題意識が非常に高まってきているということを感じた。

小学校と中学校の連携、各学校の学力実態の情報交換、その課題解決に向けてどういう取組が必要なのかってことが、校長レベルではなくて、教員レベルでプロジェクトの中で話し合われて、それが具体的な日々の授業に反映されているような取組の報告があった。

時間はかかるかもしれないが、こういった教員レベルで、お互いに前へ進もうというような動きが、とっても大事だろうと思う。

また、市教委が本気で学力向上を進めようという意識が、陰山先生の講演や、立命館大学に職員を派遣するなど、教員レベルで動きがもう始まっている。そういった取組が今までは無かったと思う。

今回の陰山先生の模範授業についても、それを各学校の先生方がそれぞれ直接見て、授業のイメージをつかんで、そのイメージを学校現場で実践しようっていう気運が、ようやく見えてきて

いる。

このような取組をもっともっと地道に積極的に積み上げていくことが、中学校の学力向上にも必ずつながると思う。

そんな意味で市教委の本気度、それが教員レベルにまで落ちてきている。

そこで、一人一人の教員の意識はどうか、最もそこが大事なところだと思う。参観された方がどのように学校現場にそれを戻すか、学校現場に生かすか、その辺の手立てがもうちょっと工夫されてくると、さらにスピード感をもって学力向上につながってくるんじゃないかと思う。

○市長

私も陰山先生の講演を聴いて非常に自分自身も意欲が湧いたことを考えたときに、波及効果は大きいし、1回の講演だけでなく、年数回やるような形で取り組んでもよかったと思う。生徒は常に変わっていくので、1回だけでは学校の校風とかが染み付いていかないと思う。

その辺は教育委員会としてはどのように捉えているか。

○事務局

今年度は、陰山先生の陰山メソッドを重点的に取り組んでいくため、3校をモデル指定校としている。その結果も検証しながら、また先日の授業や具体的なお指導も含めて、来年度に生かしていきたい。

○委員

私も学校訪問をして、少しずつ子どもたちが落ち着いている様子が見られてきたと思う。

この前、陰山先生の授業も一緒に拝見をし、話も聞かせていただいたが、とっっても前向きな先生で、それが先生方にも伝わっていた。そして市教委の先生方もいろいろ取り組んでいることで、少しずつ学力も上がっていていると思う。

今、中学校区での取組がさかんに行われているが、前々から中学校同士のつながりはあったと思うが、もっと先生方同士の連携にも今後取り組んでいただきたい。

また、国の脱ゆとりというのがとても大きく感じていて、地方では直接学力に影響してくると思う。東京の方では私立があって、学力レベルっていうのはそれほど変わってこないと思うが、地方の方だと、脱ゆとりになったおかげで、授業で学習内容も変わると、それだけ入ってくるものも変わってくると思うので、都会との差がなくなってきていることも、少しずつ偏差値が上がってきている一環なのかと感じている。

○委員

1ページの2の平均の目標値なんですけど、現状平成27年、それから目標値中間の31年、それから最終目標の35年、普通中間にある程度目標を定めてさらに上を目指して最終目標というイメージがあるんですけど、ここは同じ数値が並んでいるが、その意図を教えてください。

もう1点、5ページの授業改善チェックリストから、③の板書をするということなんですけど、10年くらい前、旧能生町の学校を訪問させてもらったときに、教室に大きいテレビが設置されて、そこで先生自ら作ってきた資料を黒板に板書するのではなくて、その大きいテレビを利用して授業された姿を何度か見て、黒板に書くよりも時間が短縮されて、簡潔にまとめられていて、いいなあという意識をもったんですけど、今はそうではなく、また昔のように板書が重要視されているということなのか。

○事務局

まず目標値につきましては、中間目標と最終目標の値が一緒です。これは、この55という数字

を年度ごとでなく、すぐに目指していこうということを表している。55 というのは、非常に高い数値ですが、この高いところを目指していきたいと思っている。

それから2点目の板書については、課題が明確にされていることが重要であり、板書に書かれていなくても書いたものはマグネットで貼ってあるとか、何らかの形で今日の学習はこういうことをするんだということを、子どもたちがしっかり把握していること、自覚していること、そして終わったあとに、今日の勉強はこういうことを学んだんだということがはっきりとわかるということ、これが大切だと思っているので、ここの③のところに記してある。

○教育長

今の目標の件については、当初教育委員会でも中間は、55 より低いところを出したこともあったが、3年間で卒業する子、あるいはもう1年で卒業する子もいるわけだから、そうではなく、将来的に、上がるようなところにどの子も同じ目標をもって取り組むべきではないかという意見もあったことから、一気にには上がらないかもしれませんが、できれば、来年でも55になるように、あるいは中学校では50になるように取り組んでいきたいという目標値である。

それから最初に数字を、偏差値を示させていただきましたが、学校毎の結果も出ているので、それを学校の中で分析をして、2学期の授業に生かしていくという取組をしているし、その取組の状況、分析の結果を教育委員会に報告をいただくことになっている。それを教育委員会として、全体を見て、これからの取組にしていきたいと思っている。

当然学校の役割もあるし、家庭でのお願いをしなければいけないところもある。その他、行政としての役割もあることから、行政としてできることは何かを考えていきたいと思っている。

それから黒板の件ですが、大きなテレビというのは電子黒板のことだと思うが、これを全学校には導入をしましたが、まだ一部活用しきれていないところがある。先生方へのフォローも足りなかったところもあるが、今後については、こういう電子機器、ICTあるいはタブレット、そういうものを行政として国の支援も受けながら、教育環境の整備に取り組んでいきたい。教育的なハードの設備、人員が必要な場合にはソフトの整備、そういうものを併せて行う中で、学力向上につなげていきたい。このプロジェクトは1年で終わらせないで、少し続けていきたいと考えている。

○委員

今年は3校ですが、全学校にやっていただきたい。やはり全体で上げていかないといけないと思う。

○教育長職務代理

電子黒板ですが、活用しきれていないというか、大半は活用されていないと言った方がいいと思う。電子黒板そのものの利用がかなり面倒なのか、実際に扱ったことはありませんのでわかりませんが、日頃の教材研究の中でそこまで手が回らないという現状があるのか、あるいは意欲の問題なのか、その辺は整理しないと宝の持ち腐れになってしまう。

おそらく、日々の子どもの対応に追われて、とてもそこまで手が回っていないという現実もあるのではないかと思います。では、非常に意欲的な教師であればそこをなんとかしてやれるのか、その辺が機器の活用という現代的な問題に対処するときの非常に大きなポイントになると思う。そのこのところをしっかりとわきまえていかないと、いろんな機器をそろえたけれども、現場はそれでてんでこ舞いしたり、あるいは全然活用しないままになってしまう状況が生まれたりすると思うが、その辺いかがか。

○事務局

電子黒板の活用ということにつきましては、実態を見ますと非常に活用している学校や教師もおりますが、そうでないところもあるのはご指摘のとおり。なかなか準備が整わないというところもあるかと思うし、教員の資質、得意な先生とそうでない先生ということもあるかと思う。ですが非常に有効なところもありますので、ハードの方で準備をしていくと同時に、教職員への研修を行い、有効に活用できるようにしていかなければならないと考えている。

○教育長職務代理

ぜひお願いします。

○委員

2ページの資料の(2)のところ、児童、生徒の学ぶ意欲、これは家庭学習への取組とか普段の授業への取組とか、子ども自身が意欲をもつことは非常に学習を進める上では大事だと思う。

一貫教育の立ち上げのときに、この意欲向上のための漢検、英検の補助とか、中学1年生の大学見学とかをかなり重点をかけて取り組んできていると思う。その施策、事業が本当に子どもたちの意欲に向上につながっているのかどうか、そろそろ見直し、改善をする時期にきていると思う。

一貫教育方針の見直し、基本計画の見直し、改善がなされ、それに伴って補助事業として意欲を高めるための事業としてやってきたわけだが、これが本当にいい事業になっているかどうか、その辺の実態とこれからの見通しを、検討をする時期にきていると思う。漢検、英検だけでいいのか、他の検定だって結構ある。それから、大学見学も中1でいいのかどうか。逆に言うと市内の高校生に大学見学で意欲向上のための道を開くというように切り替えてもどうなのか。だとすると中1にとって意欲向上のための別の施策はないのか考えてみる。それでいろんな視点が必要だと思うが、まず今までの取組の実態の検証、成果と見直しの部分のところをしっかりと踏まえた上で、どのように改善していくかの議論をぜひ教育委員会も含めて、事務局サイドでも学校現場からの意見も吸いながらやっていく必要があると思うし、あるいは生徒の側の意識調査、抽出でいいので、あの時の取組の事業について、今現在思うことは何なのかを逆に聞き取る、そして生徒の気持ちを汲んでみる、保護者はどのように思っているのか、このような部分のチェックも必要だろうと思う。

○事務局

漢検については、今までは4年生から6年生までに補助していたが、今年度から全学年に補助するようになった。それにより、漢検を受けた子どもの人数が、昨年度の1回目と比べると倍増している。これは、非常に子どもたちがそれについての意欲をもっていると考えている。英検については補助率を多くしているが、昨年度の1回目と比べると、数については、昨年度よりも20人ほど減っております。年間を通して見て、検証をしてみないといけないと考えている。

また、委員おっしゃるように検定試験はその他にも数検とかもございます。そういったものの補助はどうなのかということについても、考えていかなければいけないと思っている。

また、大学見学については、中学校1年生という時期で大学ということを見たことがない、経験したことがない子どもたちが、その場を見つめる、行ってみて学生から話を聞いてみるということは、将来を見通す上での大きな経験になると思っている。いずれにしても、検証は日々していく、年々していかなければならないと思っている。

○教育長職務代理

現在は、そろばんはどうなっている。以前、珠算検定はなかなか権威があり、電卓よりも速い計算をする方もいたが、現状はどうか把握したものがあるか。

○事務局

そろばんの検定は把握していない。そろばんについては小学校でも、単元として、出てくるが、検定が今どようになっているか、人数等についても把握していない。

○教育長職務代理

そろばんは、単に計算が速くなるとか、数値能力が高まるとかだけじゃなく、指先を使うという一種の身体能力にもかかわってくる。今はものすごく疎外され、物を作るのも、ナイフを使うことも、みんな子どもはダメになっている。これは教育の責任だと思う。そういう中で、そろばんもだんだんと影を潜めていっている。たくさんあったそろばん塾も今は影を潜めている。しかし、そろばんは、一種の日本の伝統的な計算機でもあるわけですので、そういった意味でも機会を見つけて推奨していくこともあっていいと思う。

○委員

1 ページの4の表ですが、小学校6年生、次のページは中学校3年生ですが、この表このグラフだとその単年度のその学年の成績、言い替えれば、その学年が結構優秀な人が集まった時代とか、ちょっと頑張らなければならない子が集まった時代とかはすぐわかるが、例えば学年の部分6年生の下に5 4 3 2 1として、その時の年度を出していくと、当時1年生の子が6年後にどれだけ上がったかがわかる表ができると思う。それで、その学年がいかに上がっていったかが推移だと思う。それを出してみればいいと思う。

○教育長

学校ごとに分析されたものが結果として来ているので、それをよく見て、学校としてはどこが良かったのか、どこが手薄だったのか、そういうところを今後の学力向上の授業改善の方へ反映していくことをお願いしている。

糸魚川市全体では、数が多いので読み取れない部分があるが、学校ごとになると、委員ご指摘のとおり、傾向がわかってくる。

それからもう一つ、先ほど、そろばんの話や数検の話もあったが、糸魚川市においては、国語とか社会とかは標準であっても、数学と理科等が少し弱いという結果もある。そういうところを今後、全般的な人格形成の中で、基礎は必要ですので、力を入れていきたい。

それからもう一つ大事なのが、これから英語が国際化に伴って、知識としての英語ではなく、会話としての英語をどのように学校の中でも取り入れていくかが課題である。これから小学生の授業に英語が採用されるのも見えているので、教育委員会としても遅れないように取組をしていかなければならない。

○教育長職務代理

理科が落ち込んでいるというのは非常に心配で、当地区は理科教育センターがずっと活動をして、現場サービスをずっと行ってきている。そういう優れた組織が活躍していたにもかかわらず、こういう状況にあるということはどう考えた方がいいのかが、非常に苦慮するところである。もっと他に原因があるのだろうと思うが、個人的には、理科を教えて、理科の心を教えられていないのじゃないか、つまり、自然に興味を持つとか、自然の成り立ちに対して関心を抱くとかではなく、理科を教えるというような方向で来たために、子どもたちが理科からそっぽ向いたってことがあるのではないかと。ただし、これはもうちょっと長い説明を加えないと誤解されるおそれ

がありますので、今はちょっと差し控えますが、理科ばかりじゃなくて、糸魚川市もそろそろ教育センターを設立して、もっと多岐にわたって、その学力向上を目指すという方向性をもつ必要があるのではないかと思うので、ぜひ検討をいただきたい。

○市長

学力向上、これは本人にとっても保護者にとっても非常に大切なことだと思うし、それが上がることが我々としても望むところでもある。そのために、皆さんのご意見をお伺いさせていただいているが、私はやっぱり2つのところを中心に捉えていきたい。

指導する先生から、やはり意欲をもってもらうこと。もう一つは、子どもたちが学ぶという意欲をもってもらうこと。この2つの意欲をどうやって高めていくかが一番大事だと思っている。

ジオパーク検定もそうでしょうし、この英検や漢検、数検など、有効として取り組んでいけるものに広げていきたいし、それ以外にも考えていかなければならないと思う。

子どもたちの意欲を早めに高めていく、そして気づきを早めにやっていくことによって、夢に近づく、子どもたちの夢に近づくのだらうと思う。だから早く夢を持ってもらって、早く気づいて、早く意欲を持ってもらうという流れを作っていく。それには先生がやはり一番長く接しているわけですから、先生もそういう気持ちになってもらう、その環境が大事だと思う。それが教育委員会の目指すところだらうと思う。環境作りが大事だと思っている。

これはもう教育委員会だけではなく、行政も地域も一体となってもらわなくちゃいけないだらうと思うので、積極的にやっていきたいと思っている。その辺の具体的な制度、施設等をしっかり捉えていきたいと思っている。

○教育長職務代理

学力とか教育の全般に関わる問題として、やはり教員の問題があると思う。教員の問題というのは、資質の問題というよりは教員異動。教員異動という管理上の問題も、これは県教委が考えることなので、市教委でどれだけそこに意見を反映していけるかどうかわかりませんが、今は基本3年サイクルで他に出て行くといったことや、3年サイクルで入ってくるといったこと、それから、新採用を多く抱えて、指導しなきゃならない大きい学校、いろんな管理上の問題を現場が請け負っているわけであるので、そのあたりが、学力向上に誠心誠意取り組むといったときに多少影響を与えてしまうんじゃないかという気がする。そういった意味で考えたときに、この地元出身の教員が今どれくらいいるのか、今後の状況はどう見込んでいるか、もしわかっていたら教えてください。

○事務局

地元出身の先生の数については、今ちょっと資料を持ち合わせておりません。

教職員の異動については、県の教育委員会がすることになっているが、それについては私たち市教委の方から、お願いをすることはできるので、その都度お願いをしているところです。教職員は異動することによって、成長することもあります。それによって育てていただいているところもあると思うので、新採用も、その学校で育ててもらって、OJTの研修がまさにそこを担うのかなあと思っているが、そこでも管理職を中心になって新採用を育てたり、若手を育てたりすることでも大切なことだと思っている。

現場の教員の中で、地元出身者がたくさんいてくれるのは嬉しいことだが、それについても調べていきたい。

○委員

今ほどの件で委員がおっしゃったことにつながるんですけども、教職員の、特に教員の退職教員、その方々の気持ちを汲みながら、人材活用を、ぜひ退職しても地元の子どもたちのためにひと肌脱いでその応援していただくというようなシステムを、教育センターのような機構の中に組み込んで、人的なスタッフが揃ったときにいい仕事ができる、そういう仕組み作り、環境作りにつながると思う。40年近くも学校現場で頑張ってきた人たちは、専門性もあるし、いろんな知見も持っている。退職しても、学校現場や地域の子どもたちのために働いてもらう。お金をもらおうと思っているわけではなく、自分の持っているものを、子どもたちのためにという気持ちは、必ず教員であれば多かれ少なかれ持っているはず。そういった方々をぜひ学校につなげたり、地域の子どもたちのためにつなげていただいたりすれば、更にまた一貫教育のサポート的なスタッフが揃うので、大きなプラスになってくると展望している。

○市長

個々にはいろいろな立場、役職でお願いしている部分があるが、システム的に統括するような体制というものを、今ご指摘いただき、もしかしたら面白く展開できるのではないかと感じたので、ボランティアでやるということではなくて、立場が明確であったり、身分がしっかりしていることが、地域貢献に役立つというものもあると思うので、そのあたりを捉えてみればいいのかなど思っている。組織的に対応できるのもいいと思っているので、検討してみたい。

○委員

保育園、幼稚園の退職者や、高等学校の先生で辞められた方も、あるいは大学に行っていた退職者も含めて考えると、相当な人数になると思う。

○市長

そういったシステムができれば、新たな展開も見えてくると思うので、行政と一体となった取組を考えてみたい。

他に無ければ閉じさせていただきたいと思いますが、先ほど申し上げましたとおり、基本的には教育現場の一番先頭である生徒と接する先生が、学ぶ意欲の向上につながる環境をしっかり作っていかなくてはいけないと思っている。ただ「学力向上」と言ってもなかなかつながらないわけでありまして、学校だけではなく、学校外の特に先生OBだとか、また地域の力が入っているような形に持っていければと思っている。以前から言っていたのは、各家庭に帰るまでの間、学校の放課後から家庭に帰るまでの間を支援できないか、こういう時代ですから、ご両親とも働く時代になってくると、それまでの時間をしっかりどこかでサポートしてやることも一つの手段ではないかというのを考えていたところでもあるし、いろんな面で、そのような先生方のいろんな長い間の知識など、出せる部分を作っていきたいと思っている。

非常にいろんなご提言いただいたことを本当に感謝申し上げます。

糸魚川の子どもたちにとって何が一番有効なのかということも見定めながら進めていけばいいのではないかと思っている。

(2) いじめ、不登校の状況について

資料ナンバー2「いじめ、不登校の状況について」事務局が説明

○教育長職務代理

いじめの根本原因っていうのは何だと考えているか。

○事務局

私は、相手のことを考える想像力、イマジネーションする想像ですが、その想像力、自分がこうしたら相手はどう考えるのか、自分がこういうことをしたら相手はどう思うのか、というような想像力が十分に育っていないということがあるのではないかと考えている。

○教育長職務代理

それは、想像力が備わっていくという成長の過程を目指すことができるのか。

○事務局

体験活動とか、またそれに応じた道徳の指導とかという心の教育を実施していく上で、子どもたちの想像力は育っていくものだと考えている。

○教育長職務代理

今の状況では、実際にいじめは無くならないと思う。

今おっしゃられたようなことは、当然重要なポイントであるだろうし、人間の成長を考えたときには必要なことなんでしょうと思う。しかし、いじめは、発生して対応してやっと一段落したと思ったらまた始まってというようなことの繰り返しで、永遠の課題のようになかなか終わらない。場面が変わるとまた新たなものが発生してくる。これが現代いじめ社会なのかと思ってしまう。

そこで、私は3の(3)に温かい学級（人間関係）作りという学級作りの話が載っているが、本当に素晴らしいというか、そういう目標をもつことは必要なんだと思う。ところが、これ実現しているかどうかというのを検証したことはあるか？温かい人間、温かい学級、人間関係が温かい学級がここに実現しているっていうのをご覧になったことはあるか？

○事務局

何をもって温かい学級なのかということもあるかと思うが、今いろいろな hyper-QU 検査ですとか、教育相談とかいうことで子どもたちの声を聞き取ることによって、子どもたちの学級作り、学級についての思いを把握することができると思うし、学級が安定していることによって、学力も向上しますし、いじめ、不登校ということについても防止策にもなるかと思う。そういったアンケート調査や子どもたちの実態を日々見取っていく中で、温かい学級、人間関係が図れている学級ということが見取れるのではないかと考えている。

○教育長職務代理

温かい人間関係というのは今の社会にあるのか。今の社会全体を見たときに、いろんなところにあると思うが、相対的にそういう社会であるということはなかなか規定しにくい。だから日々ニュースにのぼってくるのは非常に冷酷な、人間にあるまじきニュースがどんどん出てくる。そんなところに温かい人間関係なんかももちろんないわけだが、もしかしたら温かい人間関係の中からそういう犯罪が生まれるという状況すら垣間見られる。そんな危険な社会状況が一面的にあると思う。

やっぱり倫理観というのは、大きく欠如しているんじゃないか。今、道徳教科化に、ものすごく期待をしている。それはばらばらになっている、つまりリベラルな状況にある倫理観を、もっと日本人としてこうあるべき、というところに統一的にもっていく必要が強く感じられる。しかし、こういうことを言うと、そういう型にはめるのかと言う意見もあると思う。あると思うが、型にはめるのではなくて、倫理観というのはもっと崇高なる意識だと思うので、それらを構築していく、そういう教育の体制がないといけないのではないかと考える。そういう意味で道徳の教科化に大いに期待をするが、いじめという問題もひるがえってみると、この倫理観がある程度人間に備わってくるという状況が、実現するかわかりませんが、もし取組によって出てくれば、思い

やりとは別に自らを規制する、そういう意識が、車の両輪のごとく働いて、いじめ撲滅につながっていくのではないかと思う。果たしてそうまい具合にいくかいかないかわからないが、そういった中で、今のこのいじめの問題を捉えていかないと、相手を思いやる気持ちができたからいじめはなくなるという、そうなのかなと思う。確かに相手を思いやればいじめるなんて現象は起きないというのが通常の見方なんだが、各学校の学級目標とか、相手を思いやるというような文言はあちこちで多用されている。だけど、現実には思いやりとは程遠いいじめっていう現象はどんどん起きてきている。あるいは、そういう感情がこう芽生えていく。したがって、これからはやっぱりいじめをなくすもっと理性的な部分、人間の理性をもう少し重点的に取り上げていく教育の部門が必要になってくるのではないかと思う。これには大いに反論もあるかもしれないが、自分の考えを述べさせていただいた。

○委員

1の(2)の不登校の状況の11人っていう人数が出ているが、これはいじめによる不登校なのか、あるいはいじめ以外による原因による不登校なのかお聞きしたいし、小学校ではないのだが、中学校にきてこうポツポツと出てきているが、小中つながるような不登校の該当児童はいないのか。中学に行って初めて出てくるのかどうなのか。

○事務局

いじめによる不登校ということは今のところ報告ありません。それから、小中続けてと連続ということで、今の中1で2名あるが、これについて、小学校の頃に不登校傾向であった児童が含まれている。昨年度の同時期と比べると、中学1年生が1人であった。それが、今の中2で3人になっているので、新しく不登校になった子が、プラス2ということになっている。今までの傾向だと中学2年で増えるという実態が把握されている。

○委員

その該当生徒ですが、主な原因、なかなか一つの原因に決め付けられない部分もたくさんあり、いろんな部分が複雑に絡んでいると思うが、家庭的な事由とか、学習的な面とか、友人関係とか、精神面とか、身体の健康面とか、それぞれ考えられると思うが、そこらあたりの追跡とか、面談によるヒヤリングとか、生徒と担任とのやりとりの中で原因みたいのものがはっきりしてきたとかいう部分の背景的なものがわかったら教えていただきたい。

○事務局

不登校の原因を特定することは非常に難しい。いろんなものが絡んで影響し合っているので、これが原因ということは一つで言い切れないところがある。これまで調査の結果を見ると、小学校では家庭の問題ですとか友人関係というようなことが出てきていたが、中学校では学力の不振、勉強になかなかついていけなくなっているというようなことも理由として上がってきている。先ほどの学力向上とも関係するが、これも不登校対策ということについては、非常に大きなところだと考えている。

○教育長職務代理

今の話に該当するような事案を、ある方から相談を受けて話を聞いてみたのですが、不登校になった直接の原因は冷やかしのんだが、結局それにまつわる家庭の問題、友人関係、いろんな要因が絡んで、そしてそれに怠惰な気持ちも加わったりして不登校に陥った。それを回復するために家族がどれだけ苦勞しているか、単にしつけの問題だけではない。その子が育ってきた環境は、微妙で複雑になっている、そういう事例がある。そういったことの絡んだ不登校ですから、今言

われたように、簡単にはその原因を特定できないし、単純に解決していくというようにも思えない。それだけに、現実的にニートになっていく大人たちもいる。そうなってほしくないから、できるだけその成長の過程にある段階で、何らかの解決を図っていかないといけない。そのためには、不登校について、できるだけ解決していく方向性をもつ必要があると思う。

○市長

私の方から少しこの点についてお話させていただきたいと思うが、私も非常に残念に思っている。本当にいじめに関してはあってはならない、不登校も起きてはならないという中で、このような数字を見ていると本当に残念でならない。

どうして起きるんだ、なぜ無くならないんだと考えると、やはり児童社会、生徒社会又は我々人間社会において、これはもう潜在的に人間の持っている性でもあるのかと思っているのだが、だからと言って許して良いということではない。

そういう中で、いつも起きてから学校の先生が、学校や教育委員、行政も、緊急としてその対応に苦慮されることに対しては、その何倍もエネルギーは費やされることがある。その前段でなんとかならないのか、そういう中で、漠然としているかもしれないけれども温かい学級作りは大事になってくると思う。

また、不登校については、5日以上欠席した場合という、本来は1日でも大事に捉えていかなければいけないと思うが、それに対処できず継続するとしたら、子どもの一生においては本当に心折ることで、一生引きずっていくものもあると思う。そうすると、本人もそうでしょうし、家庭も非常に大変な状況になるわけであるので、学校の果たす役割を考えると、先ほどの学力向上と同じだと思う。学校の先生に全ておまかせしておけばいいという問題ではないと思う。

皆さんからのご意見を伺ったり、こういう一つの報告をみたりすると、これはもう県が国がということではなく、我々糸魚川の教育委員会、糸魚川の市、行政の中でも早急に考えていかなければならない。今ソーシャルワーカーの配置という形であるのですが、すぐにこの中1の案件などについても取り組むべきだと思う。これは医療的な部分もあるのかもしれませんが。

しかし、いずれにしても早く対応しないと、子どもや家庭が本当に大変になってくると感じている。一つの基準があるからということではなくて、もっと早く取り組んでもらいたいと思う。

○教育長

学力のところ、教育センターという提案をいただいた。いじめ、不登校の対応についても、今は教育相談センターというところがあって、そこと教育委員会と相談員と協力しながらやっているが、それをもう少し連携を強固にして、組織が機能するような形にしていかなければいけないと思っている。

今も一人の不登校の子に対して、先生方と相談員がチームを組んで対応はしているが、もっと広く対応することによって不登校の解消になる、その子の授業復帰ができる、そういうのを目指していかなければいけない。そういう取組を、先進的なものも見させてもらっているが、そういうものを参考に、糸魚川市でももう少し進める一歩前へ出なければいけないと感じている。

○市長

ただ単にそういう枠内だけでなく、もっと市全体に捉えてもいいと思う。例えば、学校全体の枠で起きている部分もあるかもしれませんが、起きていない学校は起きていない。そうすると、この今少子化の中において、複式だとかいろいろあるかもしれないが、市全体の中で教育施設を活用していくという対応もいいのではないかなと思う。やはり狭い枠の中で対応しようというのは大変

難しい。

どうしても行政というのは枠の中で考えてしまうというのがあるが、そういう枠をあんまり考えないでできないのかというところがあつていいと思う。そんな感覚で捉えていかないと、無くならないのではないかと思います。

○教育長

個人のプライバシーを配慮するあまり、ある程度狭い中で対応しているという部分もケースによってはある。それを、少し枠を広げることによって、解決が見えるという事案もあると思う。

○委員

本当に子どものいじめの問題はすごく大変なところが多い。それに関わっている先生方の負担もものすごく多いと思う。なので、先生たちの心のケアというか、そういうところのフォローをしてほしい。やっぱり一生懸命取り組んでいただいているのに、保護者からはそのように見られていないことも多いと思うので、そのところの先生達へのフォローもできればと思う。

○市長

私もそれが大事だと思っている。

ですから、今学力向上で陰山先生をおいでいただいているのもその一つです。あの陰山先生の話聞いていると、自分が前向きになって、なにかこうやれるのではないかという気持ちになっていく、それが大事だと思っている。

やはり、どうしても起きた事柄の中で、責任追及だけをされるとだんだん落ち込んでくるわけで、いろんなやってきたことが間違いだったのか、自分がなぜというようなだんだん落ち込んでいくような形になっていくのではないか。それでは子どもたちがかわいそうでもある。

本人、当然先生も大変なんですけど、それに接している子どもたちもかわいそうなので、その辺を早く解消してあげるには何がいいのか。

これはもう学力向上もいじめも不登校もみんなつながっている問題だと思っています。

学力が向上したかったら、いじめや不登校を無くしていくことが先だということなんだろうと思う。

そのようなことにもっていけるように、早めに対応していきたいと思うし、また皆様方にもご指導いただきたいと思っている。

4 その他

○事務局

次回の日程ですが、事務局としては今年度中に2回の会議を予定していることから、次回を年明けの2月頃予定させていただきたい。別途、日程調整をさせていただく。

5 閉会（閉会 10：26）